

明解

平安朝日記

文學新研究



吉田辰次著

解明
平安朝
日記
文學
新研究

東京 精文館 發行

昭和二十八年十月廿五日 印刷
昭和二十八年十月三十日 発行
昭和二十九年五月三十日 再版

定價 金貳百五拾円

送料 金參拾貳円
地方賣價 式百六拾円

著者 吉 田 辰 次

東京都千代田区神田神保町一ノ三九

発行者 北 村 宇 之 松

東京都新宿区荒木町五番地

印刷所 誠文社印刷所

東京都千代田区神田神保町一ノ三九

発行所

株式会社

精文館書店

電話東京(29)一六七五番
振替東京四〇三五番

(平安朝日記文学新研究)

凡 例

一 本書は平安時代における次の文学的な日記を抄録し、高等学校生徒の学習及び一般教養に資する為に著したものであります。

土佐日記 蜻蛉日記 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記

二 本書には各日記中、小題目が設けてありますが、これは原本にはないので、読解上便宜を計つて、内容に適當するものを付けたのであります。

三 採録の文章は、教養上重要な箇所であり、大学入試準備として是非学習しておかねばならぬ部分であります。

四 抄録であるから、前後の關係が不明に陥り易いので、「落穂」という欄を設けて、この欠点を補う為め、必要な本文を掲載しております。

この「落穂」は、右の前後の關係を明らかにするばかりでなく、古典語の知識を養うに必要な部分も選んであります。

五 解説・通釈・語釈・語法・研究・鑑賞・設問は、前に著した「源氏物語新研究」と同様であります。語法については、一層詳細に説明し、初学の人にもよく理解されるようにしてあります。

目次

序説
講説・研究

土佐日記

一起筆	三
二別れ	六
三はなむけ	一〇
四心ある者	一三
五宴遊	一六
六両守交驩	二〇
七亡児を憶う	二四
八暮より元旦に	二八
九若菜	三〇
一〇照る月	三六

一一	海の上	六二
一二	精進	六九
一三	みなそこの月	七一
一四	三笠の月	七四
一五	黒鳥	七九
一六	追風	八三
一七	神仏の恵み	八六
一八	長き春日	八八
一九	忘貝	九二
二〇	三十文字あまり	九四
二一	幣の鏡	九八
二二	船酔	一〇一
二三	渚の院のあたり	一〇三
二四	上るついで	一〇六
二五	桂川	一〇九

二六 家に到りて……………三三

蜻蛉日記

一 序……………一九

二 頼もしき人……………三二

三 山寺へのぼる……………三六

四 母の死……………三九

五 あふひ……………三二

六 絶えぬるか……………三三

七 三十日三十夜……………三六

八 道すがら……………四〇

九 時雨ふり……………四四

一〇 火災……………四九

一一 郭公……………五一

一二 袖のこほり……………五四

和泉式部日記

一 夢よりも	一五九
二 昔の縁	一六四
三 寝ざりける	一六七
四 雁がねを聞く	一七〇
五 時 雨	一七三
六 思ひかけぬ筋	一七四
七 正月一日	一七七
紫式部日記	
一 土御門殿	一八三
二 御修法	一八六
三 女郎花	一八九
四 心ばへ	一九一
五 とのゐの夜	一九三

六	物語の女	一九九
七	御産の祈	一九九
八	世の中の光	二〇一
九	嬉しきわざ	二〇五
一〇	水鳥を	二〇七
一一	一行 幸	二一〇
一二	寒き日	二二三
一三	けふの尊さ	二二六
一四	御 冊子	二三〇
一五	思ひ知る身	二三三
一六	あらぬ世	二三五
一七	年くれて	二三〇
一八	宰相の君	二三三
一九	世離れたる所	二三四
二〇	和泉式部	二三七

一一	清少納言	三九
一二	真名文	三四三
一三	よろづのこと	二四五
一四	人のさま	二四八
一五	仏だに	三五〇
一六	日本紀の御局	三五三
一七	男子にて	三五五
一八	望にならむ	三六〇
一九	とちめ	三六三

更級日記

一	かどで	二六九
二	出 発	二七一
三	乳母を訪ふ	二七四
四	来年の司召	二七七

一九	芹を摘む	三一九
一八	里下り	三二七
一七	宮仕	三二五
一六	田舎の心地	三二二
一五	命の程	三二〇
一四	鏡の影	三〇六
一三	子忍びの森	三〇四
一二	参籠	三〇三
一一	父の真情	二九七
一〇	小景三題	二九五
九	隣の風	二九三
八	猫	二八九
七	後の位も	二八六
六	梅咲かなむ	二八二
五	京の家	二八〇

二〇	春秋の事	三三二
二一	冬の夜	三三六
二二	初瀬の精進	三三〇
二三	字治	三三三
二四	むくくしき宿	三三七
二五	盗人の家	三三九
二六	有明の月	三四一
二七	西へゆく月	三四二
二八	夫の赴任	三四五
二九	夢路まどひ	三四八
三〇	述懐	三五〇
三一	姨拾	三五三
三二	蓬が露	三五四
<p>讃岐典侍日記</p>		
一	はしがき	三五九

二	まもり参らせ	三六三
三	見まゐらす	三六五
四	鏡の音	三六八
五	さるべきたび	三六九
六	宮のぼらす	三七三
七	たゞ具して	三七四
八	悩む心	三七八
九	先帝の月忌	三八一
一〇	降れ降れと雪	三八四
一一	一昨年 <small>の</small> 事	三八六
一二	供養の花	三八七
一三	膝几帳	三八九
一四	笛の譜	三九三
一五	晦の夜	三九七
	語句・事項索引	四〇一

解題

平安時代の日記文学

日記は記録の一形式である。日々の私の歩んだ足跡を記しとったものが日記である。

およそ記録は、過去の事実を、或は長歳月に亘って、対象の起伏に任せて記しとるか、或はそれ等の一断面、一断面を拾い集めてか、又はその一断面の摘録である。

そして、その対象たる事實は、集団的な存在体のものか、或は個人のそれか、しかもこの個人は、自己か、他人かである。

日記と呼ばれるものの常識は、私の断面の集録であるから、日記は私生活の断片であって、それに恒久性を予想するものである。しかし、私生活であるから、公団記録―歴史の如く、必ずしも公開を希望するものではない。否、寧ろ、他見を忌み嫌う性質のものである。

ところが、公団―公職、公人の日記には、過去において、その性質を異にしたものがある。

平安時代において、太政官の外記や、中務省の内記などが、朝廷の儀式・典例・行事を記

史料記録

録したもの、或は諸国の国司の役所の記録は日記類であって、これは公の史料となるもので、私生活の日記とは違って、その記録の際において已に、ある範囲の公開を意識においたものである。

或は又、官職が世襲となつてからは、各家々に、その職務についての記録と、それについての私家の感懐などが記された「家の記」と見られるものがある。「家の記」はその家に伝わるべき秘話であつて門外不出の記録である。

他に又、宇多・醍醐・村上三帝の寛平御記・延喜御記・天曆御記などの宸筆（せんぴつ）の日記がある。これを初めとして他の天皇の御記があり、前述の二項の公的記録に合わせて、私生活も混入する記録が、この時代に公卿などによつてなつたものが、数多現われている。九条師輔の九曆、中園太政官公賢の園太曆、藤原忠平の貞信公記、藤原道長の御堂閔白記はその主なものである。

これ等の記録は、すべて「日記」と呼ばれる部類のものである。

表記方　これ等記録の表現方はどんな様子のものであつたであろうか。暫く大和時代に溯つて考えて見たい。

我が国に文字の伝つたのは、西暦二五〇年前後であろうが、それまでに備忘的にも、交際上からも、ある範囲における標識は用いられていたのであるが、この文字―漢字が公的な、一般的な表記号として用いられることになつた。応神天皇の十五年（二八四）には、聰明な皇子稚郎子（わかし）は、百済王の使者として来た阿直岐（あぢき）を師として学び、翌年には百済から王仁（わに）が来て論語や千字文（せんもん）などを献じている。この事から見ると、漢字によつて、思想、感情が表記されていることも想像に難くない。

ところが、孤立語である中国語を表記する漢字は、膠着語である日本語を表記するには甚だ不便である。語法からいえば、漢文は日本語を表わすには不自然なものである。元明天皇の和銅五年(七二二)に太安麻呂の奉った古事記の表現法が純漢文でなく、国語を表現するに、漢字の音を仮借したのがこの事情をよく現わしている。元正天皇の養老四年(七二〇)に、舍人親王などの上った日本書紀は純漢文といってもよいが、やはり歌や、敬語は漢文では表現できなかった。万葉集にしても、題詞は漢文であるが、歌は所謂万葉仮名で、漢字を仮借している。

この所謂万葉仮名は、種々の変化を経て、平安時代初期に仮名が制定された。このことは、我が国文学史上に重大な貢献をもたらしたことはいうまでもない。自由に、内にあることを遺憾なく、自然に、外に表現することができ、容易に、自然に、内に受け容れることができるようになった。

ところが、人間の性癖として、難きを仕了おしえるのがえらいのだ。困難を克服する処に快味がある。難解な漢籍を読了し、人の難しとする漢詩文を作成するのは、聴敏のよくする処だとして尊ぶ。かの詩歌音楽に秀でていたとされる藤原公任(一〇四二)が、道長の大井川逍遙に和歌の船に乗って、「小倉山あらしの風の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき」と詠じた。これは上手な歌であることが大鏡にいわれ、なお大鏡のその章に、

御みづからも宜ふなるは、「作文きくもんの船(漢詩を作る船)」にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましければ、名のあがらんこともまさりなまし。口惜しかりけるわざかな。……」

とある。これによっても、和歌に長じているよりも漢詩に長じている方が、優位であることが判

る。「才」があるとか、「学才」があるとかいえば、漢文・漢詩に勝れているのをいった当時である。だから、秀才といえば漢文・漢詩をよくするものであり、且つ男のするものとされていた。それでその反対に仮名文字は女文字とされた。

かような表記上の流風であるから、朝廷の諸記録を初め、名ある記録はすべて漢文で記されたものであった。

日記文学

漢文が公的の記録に用いられている他面に、仮名文によって、自然に、容易に思想感情が表現されていることを顧みなければならぬ。平安初期において、仮名文が女のすさびであることは、紀貫之の土佐日記の冒頭において、「男もすなる日記といふものを、女もして見むとするなり」といったので判る。そうして又、こゝにも一つ考えて見ねばならぬことは、土佐日記といふ一つの日記が、他の外記や、内記の役人が書いた朝廷の日記と違って、文学として認められることである。

日記が客観事実を、単に客観事実としての表現であるならば、それは一つの記録である。ところが、客観事実を（私の足跡も客観
事實である。）一応客観事実と認識して、自己の内に生かし、これに対して、或は感性が働きかけて、感情及び情緒となり、或は想像の世界に入って、これを自己そのものの表現としたときに文学が生まれる。

物語（小説）が、感性と想像の世界に生まれた文学であると同様に、日記文学は、自己の生活をこの感性と想像の世界に生んだものであって、単なる記録ではなく、客観事実を客観事実とのみ取扱ったも